

・ 開拓の村でのヨシの利用

刈り取ったヨシは、屋根材などとして開拓の村の建造物に使われており、特に開拓時代の移住者が最初に建てた住居である「開拓小屋」の屋根や壁には必要な材料となっています。

また、冬期間の雪害防止のために建物の外壁に建てつける「葦簀張り」の材料としても利用されています。

近年、経年劣化により、開拓小屋の屋根の茅は腐食し、一部ではなく、屋根全面の葺き替えが必要となっていたことから、開拓の村職員とボランティアが中心となり、「開拓小屋屋根葺き替えプロジェクト」が発足しました。



コラム (9)

開拓小屋葺き替えプロジェクト

開拓小屋の屋根の葺き替え作業は、平成 27 年 12 月からスタートしました。苫東にて刈り取ったヨシを用いて、1 回目の葺き替え作業が平成 28 年 7 月に行われました。

2 回目は、宮島沼のヨシを用いて、平成 29 年 4 月以降に行われる予定です。（作業の詳細な記録は、開拓の村 H P を参照してください。

<http://www.kaitaku.or.jp/kaitakugoya/kaitakugoyaproject.htm>



開拓小屋

<執筆：名畑>

・ 宮島沼とのマッチング

政策形成チームを中核とした環境生活部では、開拓の村が屋根の葺き替え用のヨシを確保する必要があったことを踏まえ、ヨシが自生している場所を探したところ、空知総合振興局環境生活課を通じ、宮島沼でヨシが「やっかいもの」となっていることが分かり、開拓の村と、管理者である宮島沼水鳥・湿地センターとのマッチングを行いました。

・ 実施状況

刈り取り作業

◇ 日 時 平成 28 年 10 月 25 日 (火) 11:00~15:00

◇ 参加者 一般財団法人北海道歴史文化財団職員、開拓の村の造園委託業者、開拓の村ボランティア 計 19 名

◇ 刈り取り量 183 束 (4 t トラック 1 台分)

刈り取ったヨシは現在、開拓の村の倉庫に保管し、乾燥させており、平成 29 年 4 月以降に、開拓小屋の屋根等の材料として葺き替える予定です。



・ マッチングによる費用面のメリット

宮島沼では、刈り取り作業にかかる人件費などが、一方で、開拓の村ではヨシの材料費（15,000円／束を500束で約750万円）や旅費を含む委託費（数百万円）がそれぞれ節約でき、お互いにウィン・ウィンの状況が生まれました。

・ 今後の展望

◇ 茅葺き技術の伝承

道内には、茅葺きを専門としている業者はおらず、材料があっても、刈り取り、保存処理、加工、屋根への固定といった技術がありません。また、本州においても茅葺き屋根自体が少なくなっているため、国内からその技術が失われつつあります。

開拓の村の葺き替え作業では、開拓の村のボランティア職員に茅葺きの経験者がいるため、その方の知識と技術のほか、造園業者と開拓の村職員により蓄積された研究成果などの活用によって、試行錯誤しながら作業が行われています。

茅葺きの技術は貴重であるため、その技術が途絶えることがないように伝承することは必要です。そうした機会を開拓の村で設けることは、技術の伝承に寄与するだけでなく、開拓の村の価値を更に高めることにも繋がると考えられます。



◇ さらなる活用

開拓の村では、茅葺き屋根や葦簀張りの材料としてヨシが必要であり、安定した量の確保が見込める宮島沼でのヨシの刈り取りは、沼の環境を保全するためにも有益な作業であることから、今後も継続していく予定です。

今後は、刈り取りから茅葺きまでの一連の作業を教育・観光資源化することや、宮島沼の観察小屋の壁を開拓の村の技術を利用して作るなど、資材と技術の提供関係を維持・発展させていくことが期待されます。

葺き替え作業の際には、安全のため、足場を設置する必要があり、1度につき数十万円程度の費用を要するため、開拓の村では、毎年の必要量を計画的に見積もる必要があります。大量に発生するヨシの刈り取り量と見合う利用量の調整を図るためには、開拓の村だけではなく、他にもヨシを活用する施設などでも作業計画の策定が必要と考えられます。

・まとめ

今回は、開拓の村と宮島沼水鳥・湿地センターとのマッチングを実施し、「やっかいもの」を資源として有効活用につなげることができましたが、こうした事例を増やすためには、日頃から情報収集と情報共有に努め、ネットワーク作りを意識していくことが大切です。

コラム (10)

ヨシはアシだった？

ヨシは、昔は「アシ」と呼ばれていましたが、アシが「悪し(あし)」を連想させるため、それとは正反対のヨシ「良し(よし)」に言い換えられたそうです。

こうした言葉を「忌み言葉」と言い、他には、スルメは「する＝賭けで負ける」を連想させることから「アタリメ」に言い換えられ、また、東京の亀梨は「なし＝無し」を連想させることから「亀有」に地名が変わるなど、こうした事例はとても多いそうです。

<執筆：名畑>



鶴と葦
(鈴木春信・画、18世紀)

4 「北海道開拓の村」の活性化に向けた方向性の提案

(1) 実証事業の結果

北海道開拓の村をモデルに、イベントの開催、情報発信、協力者とのマッチングの3つのアプローチで実証事業を実施しました。

いずれの事業も大学生とのワークショップや有識者ヒアリングで明らかになった課題の解決に資する新たな取組であり、本検討チームの若手職員が主体となって進め、指定管理者はあくまで協力者としての位置付けで参加しています。

開拓の村をより一層活性化させるためには、従来の考え方にとらわれず、前例がない取組にチャレンジすることが必要であり、この歩みをさらに進めるために、今後の開拓の村の方向性を検討し、提案したいと思います。

(2) 方向性のイメージ

今後は、新たな財源や労務等を外部から確保するファンドレイジングを推進することを前提に、従来の「教育文化施設」から交流人口の拡大をより意識した「学習型アミューズメント施設」に徐々にシフトしていくよう、提案したいと考えています。

ファンドレイジングを推進するためには、北海道文化遺産活用活性化実行委員会による「北海道ヘリテージ・マネジメント専門職育成講座」や、本事業におけるコスプレイベントの開催など、村を舞台とした民間講座や、村の建造物・駐車場などの空間を活用した参加体験型のイベントを、民間企業に主体となって開催してもらえるよう、これまで以上に働きかけていくことが不可欠です。

また、実施に当たっては、民間企業への呼びかけ方や、設置者と民間企業の双方がウィン・ウィンとなるような関係の構築を検討していく必要があります。

この提案のポイントは、以下の点にあります。

- ・民間企業の企画・主催で行うこと
- ・民間企業が得た収益(利益)の一部を「北海道開拓の村文化財保存基金」(以下、「保存基金」という。)に積極的に寄付してもらうこと

平成21年に創設された保存基金は、これまで入村者などから約500万円余りが寄付され、指定管理者において計画的に建造物を修繕するなど有益に活用されています。

北海道開拓の村の建造物保存にご協力をお願いします
北海道開拓の村文化財保存基金



北海道開拓の村(略称 開拓の村)は、北海道百年記念事業の一環として北海道で最初の野外博物館として昭和 52 年から整備を進め、「北海道の開拓の歴史を示す建造物の保存及び活用を図り、開拓過程における生活文化に対する認識を深め、道民の文化的向上に資する」ことを設置目的に、昭和 58 年4月に開村しました。

開拓の村はこの間、建造物の公開事業を通して、北海道の歴史・文化を広く道内外に発信するとともに、道民の生活文化の向上に寄与してまいりました。現在、開拓の村に移築復元・再現された建造物は 52 棟を数え、中には国の重要文化財に指定されている建造物もあり、北海道の貴重な財産として文化価値の高い施設となっております。

一方、建造物のほとんどが明治・大正期の建築様式であるため、経年劣化により柱・梁・土台の腐食や壁・土間の剥離などによる雨水の浸入、建造物躯体補強を必要とする状況であり、設置者、施設管理者による日常的な修繕では改善することが難しく、抜本的な保存修繕の必要性に迫っております。

このような状況のもと、今後も開拓の村を永続的に保存し、後世に残すためにも、平成 21 年1月に「北海道開拓の村文化財保存基金」を創設し、この趣意にご賛同いただき、共感していただける方々のご厚志を募っております。皆様のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成 27 年 9 月吉日

北海道立総合博物館施設管理者



北海道歴史文化財団

◆ご賛同いただける方へ

- (1) 北海道開拓の村 旧札幌停車場のホールに募金箱を設置しております
- (2) 銀行振込による方法

金融機関：北海道銀行 新さっぽろ支店

口座番号：普通 1361718

口座名義：北海道開拓の村文化財保存基金

※5万円以上のご寄付をいただいた方のご芳名を旧札幌停車場ホール内に掲示させていただきます

◆当基金のお問合せ先

一般財団法人北海道歴史文化財団 総務部

〒004-0006 札幌市厚別区厚別町小野崎 50 番地 1 (北海道開拓の村内)

TEL011-898-2692 FAX 011-898-2694 E-mail info@kaitaku.or.jp

コラム (11)

「 Heritage・マネジメントとは？」

地域に埋もれた文化的価値のある歴史的建造物の発掘や保存活用を担う専門家を Heritage・マネージャー（歴史文化遺産活用推進員）といいます。

マネジメントとしては、これらの人々を活用し、地域に眠る歴史的に価値ある建造物を発掘、評価、修理、保存に当たるとともに、その積極的な活用により地域のまちづくりに活かすべく所有者に対して助言を行う活動をいいます。

道内では、平成26年1月にNPO法人歴史的な地域資産研究機構などが「北海道文化遺産活用活性化実行委員会」を設立し、開拓の村などで人材を育成するための講座などを開催する他、(一財)歴史文化財団が事業として実施しております。



旧武岡商店を職員・ボランティア・市民で作業(平成28年9月)

<執筆：三ツ木>

(3) 目標

本報告書では、北海道200年(2068年)に向けて、施設の活性化を目指す中長期的な視点を持って、現状を見つめ直し、課題を解決する手段を見つけ出したいと考えて検討を進めています。

村の建造物については、現時点で既に老朽化が課題となっており、平成16年度に策定した「北海道開拓の村歴史的建造物補修計画」と今後発生する建造物の補修予定から、今後の改修費用を試算すると約9億円となります。

北海道200年(約50年後)に向けて、村の活性化を図るためには、これらの改修をしなければならないことから、年間約2,000万円⁵⁰を新たに捻出しなければなりません。

この額を入場料収入で換算すると約6万人⁵¹となり、平成27年度の入村者数14万人に6万人を加えた20万人を目標と設定します。

施設の活性化を図るためのハード面の整備費用の捻出を念頭に設定したものであり、できるだけ速やかに達成する必要があります。

北海道開拓の村の入村者数 14万人(平成27年度) → 20万人

(4) 今後の対応

新たな財源や労務等の確保は、開拓の村をはじめとした道内の歴史文化施設の共通の課題であり、そうした取組を全道に広めるためには、まずは担当部署が陣頭指揮を執る必要があります。取組の推進に当たって、以下の3点を提案します。

- ・ 本検討や自主研究サークルのように、庁内から柔軟な発想を持つ若手職員を集めてチームを作り、担当部署が有識者や民間事業者などから意見を伺いながら、様々なアイデアを組み合わせて「ヒト・モノ・カネ・情報」が集まる従来の発想を超えた企画を打ち出していく体制を構築すること。
- ・ 今回の実証事業のように、包括連携協定を締結している民間企業や大学などと連携しながら、SNSを活用した情報発信や施設を活用したイベント、パネル展示会

⁵⁰ 9億円÷50年=1,800万円≒2,000万円

⁵¹平成27年度の一人当たりの収入(利用料収入/入村者数)約350円。2,000万円÷350円=5,714人≒6万人

などの普及・啓発活動、役務や資材のマッチングなどの実績を着実に積み重ねていくこと。

- ・ 近隣の地域や大学に対して村の魅力を発信し、共感を呼び込み、村に繰り返し足を運んでいただく安定的なファンを獲得することで、近隣の町内会や大学のサークルなどによる開拓の村での自主的な活動に繋げていくこと。

こうした手法を道内の歴史文化施設に広めていくことが必要です。

5 施策の提案

(1) 個別施策の提案

前項では、開拓の村の活性化に向けた方向性を提案しましたが、本項では、その方向性を具体化させるための取組を提案します。

この提案は、北海道 200 年の 2068 年を目標年と設定し、「北海道開拓の村活性化に繋がるプロジェクト」として、本検討のメンバーがファンドレイジング活用の観点から考察したものです。個別の提案内容については、附録にまとめていますので、概要について記載いたします。

提案は、「施設等整備」と「賑わいの創出」の 2 つに大別できます。施設等を整備するためには、技術を伴う役務の提供とともに資金調達が必要であり、そうした共感を呼び込むためには、魅力あるイベント等の開催を通じて、交流人口を拡大し、賑わいを創出する必要があります。

主な目的	主な内容	手法
施設等整備	役務の提供	ネーミングライツ、未来の巧による建物メンテナンス、ヘリテージマネージャー
	資金調達	公募型（記念）寄付、クラウドファンディング、パートナーシステム構築、文化財カード販売、エント茶
賑わいの創出	交流人口の拡大	コラボカフェ、フラッシュモブ、北海道 150 年限定グッズ販売、ビレッジバザール&コンサート、職員レク事業、宿泊等体験、シニアの滞在時間増、タイムスリップ、サムライソウル、ポケモン写真コンテスト、道産子感謝デー in 開拓の村

(2) ファンドレイジングの展開

ここでは、開拓の村でファンドレイジングを展開するための手順を提案します。

まずは、共感を呼び込むイベント等を行い、歴史文化財団が管理している保存基金にイベントで得た利益分を寄付として募ります。イベントは今回の実証事業を踏まえて、明らかになった課題を整理するとともに、新聞などのメディアを活用した広報戦略も展開します。

また、イベントとは別に寄付も募ります。道内はもとより、道外には元道民や北海道ファンも大勢いることから、国内を対象とした PR 活動を展開し、共感を呼び込みます。

次のステップとしては、仲間意識を醸成します。イベントの継続だけでなく、一度寄付をいただいた方に対しては、イベントなどの開催や年報、月報などのお知らせに併せて、イベント等の企画提案等を通じて積極的に関わってもらうなど、村が行う建造物等の保全活動や取組に参加してもらい仕組みを作りあげていくことで仲間意識を醸成していきます。

最後に、実利感を寄付者に与えるようにします。

開拓の村は、『北海道の開拓の歴史を示す建造物等の保存、活用による開拓過程における生活文化に対する認識を深める』ことを設置目的としています。この設置目的に合致し、実利感を与え、かつ、公益性・公共性を担保する取組として、アメリカ国内でも最大の歴史プロジェクトとして、現在も実施されている「コロニアル・ウィリアムズバーグ」⁵²があります。

コロニアル・ウィリアムズバーグでは、チケット収入、お土産、宿泊、食堂などの売り上げや一般の人々からの寄付を原資として、建造物の維持管理を行っている他、区画の一部を観光客が立入できない区域として、その中で人々がアメリカ独立前の暮らしを営んでいます。

このように、開拓の村でも収入を確保する手段を持ち、人が居住・生活しながら、観光客を受け入れる仕組みを作りつつ、村の建造物内で当時に再現する生活の営みが体験できる体験施設（学習型アミューズメント施設）として整備するなど、「ココでしか得られない体験」ができる仕組みや施設を作り上げていくことで観光客や寄付者に実利感を与えられるのではないかと考えています。

コラム (12)

コロニアル・ウィリアムズバーグとは？

コロニアル・ウィリアムズバーグ（Colonial Williamsburg）は、アメリカ独立前はバージニア植民地の都であり、独立後は州都として繁栄した街を18世紀の植民地時代の街として復元し、住民も植民地当時そのままの暮らしを営んでいる「生きる歴史博物館」です。

1926年、アメリカ独立前の歴史的な街並みを後世に伝えたいと考えたW.A.R.グッドウィン牧師は当時アメリカいちの大富豪、ロックフェラーJr.に援助を求めた結果、ロックフェラーは以降30年に渡り資金提供し、200年前の街並みがよみがえりました。

街並みは、1.5キロメートル以上にわたり、88の現存する公共建築物、50の復元された主要建築物、90エーカーにおよぶ庭園と緑地が再現されており、非公式の家屋には一般の人々が生活しております。

コロニアル・ウィリアムズバーグ財団がチケット、ギフトショップ、ホテル、レストランの売り上げのほか、一般からの寄付金（税控除対象）をもとに運営しており、毎年世界各国から百万人以上の観光客が訪れる観光地として、様々なパフォーマンスやイベントが行われています。

<執筆：三ツ木>

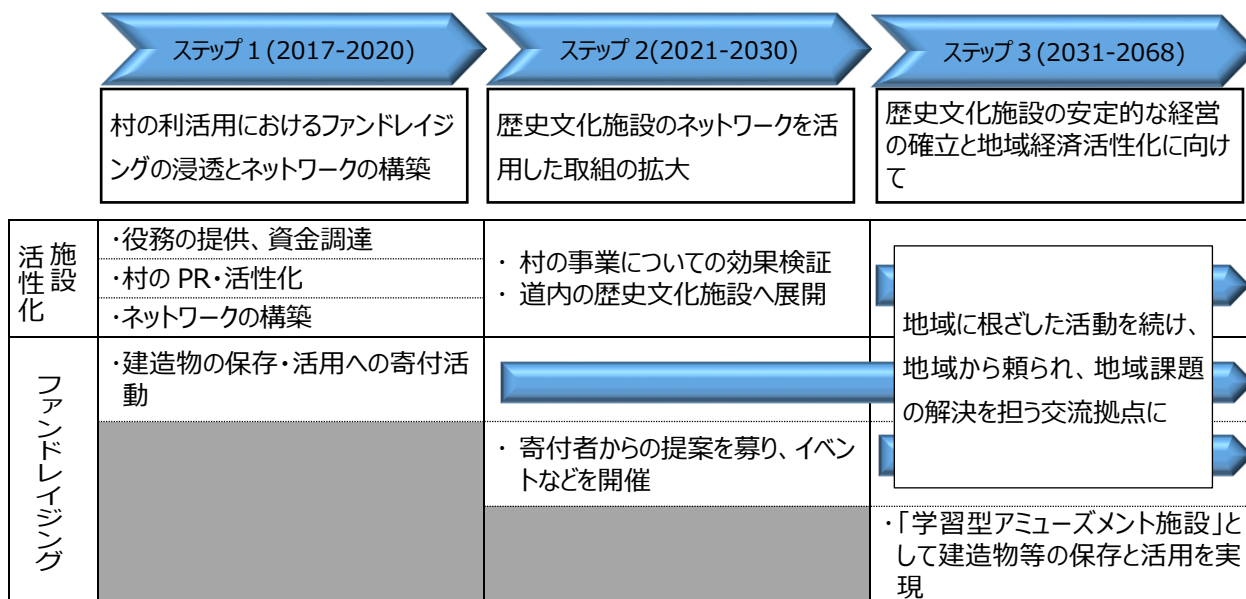


総督公邸

⁵²コロニアル・ウィリアムズバーグ財団公式ウェブサイト <http://www.history.org/>

6 ファンドレイジング・プログラムの構築に向けて

ファンドレイジングを着実に推進するためのスケジュール（ファンドレイジング・プログラム）について、次のとおり提案します。



○ ステップ1 (2017年～2020年)

村の利活用におけるファンドレイジングの浸透とネットワークの構築

ステップ1は、東京オリンピック・パラリンピックや民族共生象徴空間の開設など、交流人口の拡大に向けた大型のイベントが控えている2020年までとします。

ステップ1では、検討メンバーが提案した施設等の整備や賑わいの創出に向けた施策等を進めるとともに、道内歴史文化施設のネットワークの基盤を構築し、様々な媒体を活用して村を始めとした村の魅力を幅広く情報発信します。

○ ステップ2 (2021年～2030年)

歴史文化施設のネットワークを活用した取組の拡大

ステップ2は、北海道新幹線の札幌延伸予定である2030年までとします。

ステップ2では、道内歴史文化施設のネットワークを通じ、ファンドレイジングを活用した新たな取組等について情報共有し、各施設で様々な魅力ある取組が展開されます。

○ ステップ3 (2031年～2068年)

歴史文化施設の安定的な経営の確立と地域経済活性化に向けて

ステップ3は、北海道200年となる2068年までとします。

ステップ3では、道内歴史文化施設が「教育文化施設」から「学習型アミューズメント施設」に幅を広げ、より多くの交流人口を呼び込むことで安定的な経営が確立し、地域課題の解決の中核を担う交流拠点となります。

ステップ1では、施設等の整備や村の活性化に向けて、道職員をはじめとする道民、村、地域が連携した取組を進め、村で得られた成果を道内の歴史文化施設に展開し、ステップ2では道内歴史文化施設が各地域の先進・優良事例を共有し、一体となって取組を進め、ステップ3では、人口減少問題などの大きな課題を克服するための地域経済活性化への解決策となることを目指します。

第V章 北海道の歴史文化施設の地平を拓くために

1 北海道における歴史文化施設の活性化に向けたビジョンの策定 (北海道 200 年に向けて)

(1) 背景

北海道文化振興条例（平成 6 年北海道条例第 3 1 号）では、

今日、文化への志向の高まりは、人々の多様な文化活動の展開となって現われ、文化の概念は、生活の全般にかかわるものとして幅広くとらえられている。私たちは、文化が生活に潤いと豊かさをもたらし、これからの地域社会の発展にかけがえのないものであることを深く認識し、一人一人がひとしく豊かな文化的環境の中で暮らす権利を有するとともに、自らが地域文化の創造と発展のため主体的に行動する責務を有していることを確認する。北海道の鮮やかな四季と雄大な自然の下で、私たちは、先人たちの遺した文化を大切に守り育て、新しい地域文化を創造するとともに、これらの文化の恵沢をすべての人が享受することのできる生活文化圏をここ北海道の地に築いていくことを決意し、この条例を制定する。

としています。

この条例の施行に当たっては、現在道庁が実施している文化行政だけでなく、民間企業や道民が自ら取り組んでいる大小の取組を育て、支援していく取組が不可欠です。また、その実現のためには補助金など、現行の手法だけではなく、ファンドレイジングなど幅広い手法を取り入れ、民間企業や大学など、様々な主体と連携し、さらには、地方創生の観点から議論をしていくことが必要であることが分かりました。

(2) ビジョンの必要性

開拓の村と同様、道内各地にある博物館、郷土資料館、史跡などの歴史文化施設は、設置目的、管理主体も様々ですが、これらを活用しつつ、北海道の歴史・文化を継承し、後世に残していくことは大変意義深く、重要なことと考えています⁵³。

加えて、経済の活性化と住民の交流促進により「人口減少」などの地域課題の解決を図っていく政策のうち、「心の豊かさ」という観点から、歴史文化施設を活用した地域振興策に注目が集まっています⁵⁴。

特に歴史文化施設を活用したアートプロジェクトなどは交流人口の増加を始めとする地域活性化に繋がっていることが報告されております⁵⁵⁵⁶⁵⁷。

また、住民の参加・交流を促す文化芸術活動には、コミュニティを再生し、地域に活力をもたらすとともに、人々が健康で生きがいを持って暮らすことのできる地域社会の実現等の効果が期待されています⁵⁸⁵⁹。

50年後の「北海道 200 年」に向け、心豊かな地域社会にしていくために開拓の村を始めとする道内の歴史文化施設を教育素材としての活用や財産の保存という観点だけでなく、観光や交流人口拡大の場として活用することなどについて、幅広く議論を進めていくとともに、周辺地域住民や大学と協働でイベントを実施するなど、様々な活動を展開していくことが必要と考えています。

そのためにも、従来の文化の振興と併せて、観光施設としての活用や稼ぐ施設とし

⁵³ 文化審議会 平成 28 年 11 月 17 日 「文化芸術立国の実現を加速する文化政策（答申）」

⁵⁴ 文化審議会文化政策部会報告書 平成 17 年 2 月 2 日 「地域文化で日本を元気にしよう！」

⁵⁵ 立法と調査 2011.3 No. 314 地域活性化の新しい潮流～文化芸術の可能性と創造都市～

⁵⁶ 立法と調査 2011.11 No. 322 公立文化施設による地域活性化～アウトリーチと社会的包摂～

⁵⁷ 立法と調査 2011.12 No. 323 文化・芸術による地域活性化～活性化のための施策の方向～

⁵⁸ (株)日本政策投資銀行大分事務所 2010.9 「現代アートと地域活性化～クリエイティブシティ別府の可能性～」

⁵⁹ 東京大学大学院公共政策学教育部 児玉周丈 2015 年度事例研究 現代行政 I 最終レポート「直島における地域活性化の事例研究」

て地域を巻き込んだ活性化に向けての動きを積極的に推進し、歴史文化施設が拠点となった地方創生を進めるビジョンを示すことが重要と考えています。

現在は、そのようなビジョンがなく、本事業においてもいつまでに、何を目標に取り組みを進めていくのかが不明確であったことから、様々な実証事業を行って行く中でビジョンが提示できないものか、模索しておりました。

(3) ビジョンのイメージ

ビジョンは、これまで採用されてきた、現状の課題や趨勢などから将来像を描くフオアキャスト・ビジョンではなく、将来の思い描く姿から現在との差異を検証するバックキャスト・ビジョンとして描くことが必要です。今回、20代の若者を中心に本検討を実施した理由としては、未来の当事者であり、傍観してはられない若者が、現役時代に達成する到達点として、「こうあってほしい姿」を描くことができると考えていました。

結果として、今回の事業においてはビジョンの提示には至りませんでした。検討を行う過程で①本道の文化と自然の「ビッグヒストリー」を誰もが知り、伝えることができる空間、②全国、海外から多くの観光客が訪れ、たくさんの交流が生まれる空間、③エリア全体でサービスを提供し、受け取り、支える人々が一体となる空間、④公的資金に過度に依存せず、持続可能な運営と人材が育まれる空間であり続けることが重要であることが分かりました。

今後、2020年オリパラ東京大会に向けて国が推進している文化プログラムなどの政策との融合や「心の豊かさ」を表す指標の検討及び「北海道ミュージアム構想」の具体化⁶⁰などに未来の当事者である若者に積極的に参画してもらい、議論が深まっていくことを期待しております。

2 まとめ

地域に活動が広がることにより、存在が忘れられている文化や地域に埋もれている歴史にも光が当たり、その軌跡を繋いで線とし、軌跡とする線を面に広げていくことで歴史・文化面から発信される「北海道200年」に向けた大きな起点になっていくと考えています。

活動の継続は、「地方創生拠点整備交付金」を獲得したように、一つの「うねり」を練り上げる可能性を秘めており、「先人たちの遺した文化を大切に守り育て」、「新しい地域文化を創造し」、「文化の恵沢をすべての人が享受することのできる生活文化圏をここ北海道の地に築いていく」ことを今後とも目指していくことで、「うねり」から大きな潮流が展開され、ビジョンが策定されるのではないかと考えています。

100年後、150年後には、あの辺り一帯が宮崎駿監督の「天空の城ラピュタ」の中に出てくる植物がすばらしい勢いで繁茂する空中都市のようになっているかもしれず、あるいは、開拓の村自体がJ・K・ローリング作の「ハリー・ポッター」の中に出てくる魔法学校がある「ホグワーツ城」のようにスゴいアトラクションが設置されているかもしれません。いずれにしても、未来から現在を見つめ直した際、後悔しないように、北海道の原風景を遺しつつ、地域の活性化につながる動きを、今から私たちが自覚して、始めなければならないことを強く決意し、本報告書のまとめとします。

⁶⁰ 北海道博物館の情報発信や地域の博物館との連携強化などに取り組みます。北海道ミュージアム構想の中核施設となる北海道博物館や北海道開拓の村などについて、今後も道民に愛される施設となるよう、一体的な活用について検討します。